

「復活の光の中の聖母」

主任司祭 吉池 好高

聖母月です。今年のご復活祭が遅かったので、五月の聖母月が、復活節の喜びの中にあることを、一層強く感じる事が出来ます。

福音書のイエスの復活を語る物語の中の、どこを探しても、聖母のお姿はありません。唯一、使徒言行録の中で、聖霊降臨を待つ弟子たちとともに祈っておられるマリアさまのお姿を見出すことが出来るだけです。復活節のマリアさまは、御子の復活の光の中に完全に包み込まれてしまっておられるかのようです。その光の中で、聖母の御生涯もまた、復活の光を受けて輝いているのです。

その光の中で、マリアさまは今、天使のお告げを受けた時の、胸の高まりを想い起こされたに違いありません。あの時、自分の口を突いて出た「おことばどおりに」という大胆なことばに今さらながら驚き、全てが神さまの大いなる計らいののなかにあつたことを歓喜のうちに悟られたにちがいありません。

ベツレヘムの薄暗い馬屋の中で羊飼いたちから聴いたこと、生まれたばかりのイエスを胸に抱いて、エルサレムの神殿で年老いたシメオンから聴かされたこと、同じ神殿で、少年になっていたイエスの口から聞いた思いがけないことば、長いこと心にとどめて想いめぐらして来たこれらのことの全貌が、今、聖母の眼前にきらきらと輝いて見えていることでしょう。

身内の人々や、口さがない村の人々の間で交わされるイエスについてのよくない噂話に心ふさがれた日々のこと、身内の人々とイエスのもとを訪ねた、あのつらい日のこと、そして、あのイエスの十字架。あの時、自分をイエスの十字架のもとに立ち尽くさせた力が、どこからきたものであつたのか、聖母は今こそそれを悟られたに違いありません。聖母は、他の弟子たちのように、自分たちの前に立つ復活の主が、彼らの心を開いて、十字架の傷を見せ、平和の挨拶を送ってくださらなければ、それがイエスだとはわからなかったように、主の復活を体験する必要はなかつたのです。聖母にとってのイエスの復活は、イエスの母としての自分の人生がその光に照らされることで十分だつたのです。